

「処分を喜ぶ反動分子らは絶対に許せない！」



ねて訪 浦勝 職場を

反処分・反動秋山局長追放
叩いはこれからだ。

△第四五八号（六月十七日付）より続く▽
『日刊』編集部取材班は、六月十二日、館山の取材を終えて勝浦支部へ向うため、十二時過ぎの列車に乗った。途中、安房鴨川で特急列車に乗りかえた。館山（勝浦間は約八十分位である。その担当の乗務員Y君（勝浦支部組合員）が、われわれにこんな話をしてくれた。「昨日（六月十一日）千葉駅五〇六番（外房線）の乗務員詰所に、十人位当局の白腕章の連中が来てヨ。「この窓の大きなビラは、どうしても剥がさせてくれ」というんだ。ナ。管理局の局長室の窓のまん前に貼られて局長が毎朝気分が悪いというんだ。そう。道理の通らねえことやってるから、自分で気になってしょうがねえんだろ。乗務員が休んでいるところに、強引にドカドカ入って来て頭にきたよ。公安の連中なんかカメラ構えちゃってヨ。でも奴らが引き上げてそのすぐあと、三十分もたたねえうちに又同、

じビラが貼られたそうだよ。これ聞いてスカッとしたねえ。」そんな話の中にも今度の処分に對する組合員の奥深い怒りと、たくましく闘っていくいぶきを感じつつ、勝浦支部組合員との座談会に臨んだ。

職場ぐるみで総決起！

勝浦運転区は、木原線気動車の検修庫と運転区本庁舎や、それぞれの詰所等に四方を囲まれるように小じんまりとした中庭をもっている。ここが勝浦支部の闘争時のかつこうの集会場となる。それはさしずめ野外小劇場を想わせるたたずまいである。庭の下真中、舞台正面にあたる位置に「救援貨車」が係留されている。その黒い車体に、勢いよく「不当処分粉碎！ 青年部」「闘争勝利」と太ぶとと石灰スローガン。白黒のコントラストが外房の強い日差しの中で眼にいたいほど鮮やかだ。舞台そでにあたる周囲の庁舎の壁という壁に書かれた石灰スローガンが職場ぐるみの総決起のふん囲気を伝えている。

どっちがネを上げるか、とことんやつてやる

座談会は二階講習室で、十三時半、鶴岡支部長さんの司会ではじめられ、今春入社したばかりのピカピカの整備の仲間から、「勝浦運転区の飯は、もう三十年近く食っている」検査係の大先輩に至るまで十人余、それに乗務のあい間に色んな仲間が顔をのぞかせてくれた。青年部はすでに、二度の列車スローガン闘争を敢行している。

二、三紹介すると、

「今度の七九・八〇春闘処分は、国労・動労で

もクビを出して

ないのに、動労

千葉に對しての

み中野書記長と

布施執行委員の

二名のクビを切

った。スト規模

からすれば比較

にならぬ差を承

知で、こういう

やり方を強行し

た。誰が見ても選別的

「六月二日の抗議交渉の説明はデタラメ。裁判闘

争もおもしろくなるぞ。徹底的にやろう。」

「この前、一年ぶりに『本部』のやつらが来た。組

『もうほんとほりもさめたでし。目黒おねがいし

ます』とぬかしやがってヨ、本場にフザケタやつら

だ。区長に『とりもつてくれ』ってなきついていた

けど、皆カンカンだヨ。二〇三分で逃げ帰っちゃっ

たけどな。」

「当局がビラをはがすならやればいい。俺たちは

何回でも貼る。どっちがネを上げるかの勝負だから

ね。」

「現場の闘いを局や本社へどんどんもち込むため

に本部も遠慮なく指導と情報を現場に降してくれ。

何だってやつちゃうから。」

（乗務員41才）

「現場の闘いを局や本社へどんどんもち込むため

に本部も遠慮なく指導と情報を現場に降してくれ。

何だってやつちゃうから。」

（乗務員31才）

「現場の闘いを局や本社へどんどんもち込むため

に本部も遠慮なく指導と情報を現場に降してくれ。

何だってやつちゃうから。」

（乗務員31才）

「現場の闘いを局や本社へどんどんもち込むため

に本部も遠慮なく指導と情報を現場に降してくれ。



全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！

日刊 動労千葉

80619

NO. 460

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（電話）二二五八・九・公衆（四三）二七二〇七